

‘ありあけ’の屋根掛けハウス栽培に関する研究

第1報 高接ぎ後の枝梢管理が樹体の生育に及ぼす影響

榊 英雄・北園邦弥・平山秀文・磯部 暁（熊本県農業研究センター）

Hideo SAKAKI, Kuniya KITAZONO, Hidefumi HIRAYAMA and Akira ISOBE :
Studies on the Citriculture under (plastic film) Structure of ‘Ariake’ Tangor

1. Effect on Tree Growth by Branches in Top-working

‘ありあけ’は露地栽培では樹勢が弱く、小玉果が多く、裂果等の果実障害の発生もみられ、安定生産が難しい。このため、屋根掛けハウスにおいて保温、土壌水分管理による安定生産技術を確立する。今回は、接木後の枝梢管理が樹冠の拡大及び翌年の着花に及ぼす影響について検討したので報告する。

1. 材料及び方法

1993年4月20日に所内20年生甘夏18樹に‘ありあけ’を高接ぎし、12樹は屋根掛けハウス栽培、6樹は露地栽培で管理した樹を供試した。接木は切り接ぎ、腹接ぎで行い、6月11日に発生した新梢について調査した。枝梢管理は誘引・摘芯の時期と程度により区分し、発生した夏梢・秋梢、翌年度の着花、新梢数について調査した。

2. 結果及び考察

屋根掛け区の温度は、最低気温は露地区とあまり変わらなかったが、最高気温が露地区より高かった。接木後発生した新梢は、露地区より屋根掛け区で新梢は長く、葉数も多く、節間長も長かった。

処理後の夏梢の発生は、誘引区では屋根掛け区がやや少なかったが、総伸長、1本当たりの平均長、節間長は

屋根掛け区が長かった。誘引時期では、発生本数には差がなかったが、総伸長、1本当たりの平均長は8月上旬誘引区で長かった。秋梢の発生本数は、7月上旬誘引区で多かった。

摘心区では、屋根掛け区が露地区に比べ発生本数がやや多く、総伸長、平均長ともやや長かった。秋梢の発生も屋根掛け区で多かった。摘心時期では、7月上旬区で発生本数は多かったが、平均長は6月中旬区で長かった。誘引区と摘心区では、誘引区が発生本数、総伸長量とも多かったが、1本当たりの平均長は摘心区で長かった。

翌年の着花量は屋根掛け区で多く、露地区で少なかったが、枝梢管理による差はなかった。結果母枝の種類では夏枝が着花数が多く、総状花率が高く、新梢発生は少なかった。

以上の結果から、‘ありあけ’の高接ぎ更新では、屋根掛け条件下で行うことにより、充実した新梢の発生がみられ、早期の樹冠拡大が可能となり、2年目の着花・果も期待できた。

第1表 枝梢管理及び栽培方法の違いによる新梢発生（1993年）

枝梢管理	栽培方法	処理時期	発生した夏梢				夏梢1本当たり			秋梢発生本数
			本数	発生率	総伸長量	全葉数	平均長	葉数	節間長	
			本	%	cm	枚	cm	枚	cm	本
誘引	屋根	7月上旬	17.7	70.3	439.8	219.3	25.2	12.9	2.00	15.1
	掛け	8月上旬	17.5	64.0	492.2	267.8	28.2	15.2	1.85	7.1
	露地	7月上旬	20.8	84.0	419.1	239.8	20.6	12.0	1.73	12.6
摘心	屋根	6月中旬	6.8	59.8	185.6	106.3	36.4	19.8	1.77	19.9
	掛け	7月上旬	10.3	101.3	324.5	177.5	32.9	18.1	1.82	17.0
	露地	6月中旬	5.0	45.0	153.5	82.1	32.6	17.3	1.93	10.7

第2表 翌年度の着花と新梢数（秋母枝）

処理区	処理時期	母枝の長さ	総状花数	単花数	全花	総状花率	新梢本数	
								cm
誘引	屋根	7/8	28.6	39.7	3.2	42.9	92.5	3.9
	掛け	8/3	30.8	38.7	4.2	42.9	90.2	4.3
	露地	7/8	29.6	0.0	0.8	0.8	0.0	10.4
摘心	屋根	6/16	28.9	35.3	2.6	38.0	92.9	3.0
	掛け	7/7	30.1	6.2	2.5	8.7	71.3	10.9
	露地	6/16	29.1	0.0	1.2	1.2	0.0	9.0